

(1) 1993年12月20日

燎 原

第91号



スケッチ 奥田宣子

## 農民運動散歩記(七)

品角一郎  
(遺稿)

この「農民運動散歩記」は、故品角一郎氏（一九一一～一九八一年）が、その最晩年に死に至るまで書きつづけられていたものである。

すぐれた画家であり、民主的な詩人でもあった品角氏は、一九四六年から約十年間農民運動に携わっていたことがある。日本農民組合京都府連合会の泉隆書記長のもとで、書記として京都府連の再建と発展のために活躍されたのである。この記録はその当時の思い出を書きつづられたものである。品角氏がこの「散歩記」を書かれるようになったのは、一九七八年の夏に、当時私どもがやっていた京都府の農地改革史に関する研究会で、品角氏に敗戦直後の農民運動についての思い出を語って貰ったことがきっかけ

になつてゐる(この研究会の成果は、京都府農地改革史編纂委員会編「京都府農地改革史」一九八〇年刊、にまとめられている)。本文にも書かれているような事情から、日農京都府連に関する資料が焼失してしまつたために、関係者から当時の農民運動の状況についても聴き取りを行うことになったのである。

この中では、品角氏が農民運動にかかるようになった事情や、丹後を中心とし府下全域に及ぶ農民運動の状況が、数多くのエピソードを交えながらビビッドに描かれている。

体験的農民運動史として、農地改革期（一九四五～五〇年）の農民運動を知る上で、貴重な資料となりうるであろう。

（立命館大学教授 大庭輝雄）

長壁氏と糸井一氏

またこんなこともあつた。ある年の春、長壁氏が家に泊まつたとき、「今日は糸井一君を連れて京都へきた。今度京教組の委員長をやってもらうことになつた。いままで、加悦の中学校（現、江陽中学校）の校長をやつていたが、なかなかの大物だ……。これで京教組も少しかわるよ」と話していた。

こんなことを話すのははじめてである。

後日このことを糸井一氏に話したことがあるが、そんなことがあったのかと吃驚していた。

細井和喜蔵顕彰碑

長壁氏は戦後は大阪を中心に労働運動を中心に党活動をやり、戦後は丹後、舞鶴を中心とし、労働、農民、市民と各分野にわたつて、実にはばの広い党活動をやるなかで、長期に亘つて、一九四七年村会議員に当選以来、亡くなる一九六三年の末まで、町会議員の任務を遂行してきた実にすぐれた政治家であった。この間に、一九五二年村長出馬のため議員辞任、十月村議當選、一九五四年六月村議辭任、七月宮津市長選出馬、一九五五年三月五ヶ村合併、野田川町生れ、町議選挙で當選。またその間において、村会、町会において、安保闘争、日中國交、日ソ問

長壁氏はまた、「女工哀史」の著者であり、丹後出身の先覚者細井和喜蔵の顕彰碑建立のために大きな力を盡くされた。この顕彰碑は長壁氏の案でやられたものであり、これには蜷川虎三知事をはじめ、地元の加悦町長細井直義氏を会長にすえ、地元の柴垣勝太郎、杉本利一、八木康敏、沢村秀夫、西原重一氏等をはじめ、〇名余

題、原水爆禁止問題等を地方議会で決議さすなど、実に卓越した政治手腕を發揮した日本共産党员であった。

長壁氏は一九六二（昭和三七）年六月頃病院に急に入院した。診察の結果、胃ガンで手術をただちにうけたが、再起不能だときかれ実に心配していたが、精神力で再起された。そうして闘争の陣列に復帰されたのである。この年は丹後地区の大躍進の年であった。

一九六二（昭和三七）年四月から一九六三（昭和三八）年四月にかけて丹後地区党は市町議選挙で一気に一〇数名に躍進した。この選挙には病後の軀にむちうつて長壁氏は街頭演説を連日つづけていた。

一九六三（昭和三八）年十一月衆議院選挙がおこなわれ、全国的には共産党は五名当選。京都一区は谷口善太郎氏が当選、第二区田畠シゲシ氏は次点。この選挙について、参議院補欠選挙がおこなわれ、党府委員長の河田賢治氏が立候補してたたかわれたのである。

この河田賢治候補の個人演説会が十一月二三日加悦町金屋の公民館でもたれた。この演説会に長壁

氏は、竣工として演壇にたち、火を吐くような熱誠あふれる演説をして、多くの人々に強い感銘をあたえたことは有名である。

友人からの話によると、「その日長壁さんは、余り人に語らなかつた自分の獄中生活のことも話し、河田さんは十六年間、田畠さんは四年間、このわたしは十年間投獄されたが未来を信じてガンバってきた」と話したそうである。

長壁氏は演説を終り一家に帰つて風呂をわかして、湯槽のなかで急性心不全のためになくなつたのである。享年六十五才であった。奥さんはその日東京へ行つて不在であったと聞いている。

長壁民之助氏の葬儀は、一九六年十一月二三日野田川町幾地公民館で厳粛におこなわれた。

私は、長壁氏の死を電報で知られ、その時、悲しみをこらえつつ、つきの追悼詩をつくり、葬儀のときに朗読した（注：原稿には「詩」の書き入れなし）。

### 【長壁民之助の生涯】刊行

このときがはじめてであった。

最初は長壁氏が静かに加悦、市場、石川周辺の村政の情勢を話され、が、実際に見事なもので、噛んでふくめるような話し方で大衆はうなづきながら聞いていた。河田さんは国会情勢を話され、私は最後に労働者、農民の鬨いの様子を話した。そうしていつもの例にながって、入党勧告を最後に訴え、座談会に会場を切換えたので

ある。

ことに関しては丹後地委員会が『長壁民之助の生涯』を刊行している。さらに、丹後の吉岡範夫氏が系統的によく調査されているとともに、吉岡氏は長壁氏の生涯を長編小説にしたいと私に話しておられたことがある。このことを参考までに附加しておく。

### 石川村での演説会

市場、後野にも党組織と日農の支部が組織され、私はある年ので夏、河田賢治、長壁民之助両氏と共に、石川村小学校で演説会をもつたことがある。多分文化工作隊の活動の時だったと思う。会場は予想していたよりも聴衆は多数であった。

しかし最後の入党勧告は私の任務であり、なかなか大変で、党的歴史や、党的すばらしさなどを話した。その晩は、入党者が三名あった。その夜の宿は長壁氏の宅であった。その後の宿は長壁氏の宅であったが、家に帰つてからも、演説会のことと、新入党者のこととを夜明まで語り合つたものである。

### 河上肇の詩朗読会

最初は細見覚氏が住んでいた。細見氏はクリーニング商をやりながら、党活動を戦後ただちにはじめられ、党歴は非常に古いと思う。たびたびこの家にはお世話をうなづきながらきていた。河田さんは国会情勢を話され、私は最後に労働者、農民の鬨いの様子を話した。そうしていつもの例にながって、入党勧告を最後に訴え、座談会に会場を切換えたので

座談会に残つたのは二十名余りで、主に若い人々であるが、話の中心は生活の問題を中心である。ときどき恋愛問題についても話があるが、実にそれはまれである。この時も矢張り供出、税金、インフレ等のことが中心であったが、長壁氏や河田氏がなかなか名回答をやっていたので、私は実に楽しめた。

上肇先生が同志野坂を迎える詩を作詩された。その詩を、丹後地方に朗読に行って泊まつたときであった。加悦の集会場で集会をもち、この詩を朗読したが、下手な私の朗読であったが、河上先生の詩が実際に立派であったから、集まつた人々から熱烈な拍手をおくつもらつたことを憶えている。そうしてその夜大きな感動をうけながら、細見氏の家に泊めてもらつたことがある。いま、細見寛氏の息子さんの細見半蔵氏が野田川町議として活躍している。なおこの河上肇先生の詩の朗説会は、宮津の公会堂でも開催したことを記憶している。

あればよい記念品であり、思い出の品になるが、残念なことにそれが紛失してしまって只今ではないのが残念である。この時計を紛失した場所は、京都市内の竹間校で、時は一九五〇（昭和二五）年の五月末、参議院選で大山郁夫氏を党が推薦決定する大集会をもつたことがあるが、その時、壇上にいた私はテーブルの下に時計を置き忘れて家に帰ったのである。後日竹間校をたずねたが品物はなかつた。今思うと実に残念なことを

きとめておくことにする。

工作隊は府委員長河田賢治氏を先頭に福知山国鉄労働者一名、それに谷ひろし君（現人形劇団京芸責任者）、當時島津製作所労働者、それに私、その他ソ帰同の同志一名、その他四、五名であつたと記憶している。

普通であつたら夜やるのであるが、会場の都合で昼の午後一時から小学校の講堂を借りて演説会をやつた。

例によつて、河田委員長が幻灯の「アリババの盗賊」の弁士をやらながらやつていた。つづいて、谷君が、人形を操りながら風刺劇をやっていた。その風刺劇は、

変な人気であった。ところが、これを見ていた校長が、これは太田典礼氏を風刺している劇だといつて私たちに抗議したのである。私はそんなことは邪推だといって、その誤解をとくのに努力した。校長の話では「特に首がコロリと落ちるところが悪い」となんくせをつけられた。これについて谷君は、あのとき偶然首が指からとんだだけで故意にしたことでない、そのためにあの時のせりふには苦労したと校長に話した。

実際に予期しておらなかつたことが突然起き演説会が気がかりであつたが、大きな成果をあげることができた。

議として活躍されている。なおこの河上肇先生の詩の朗誦会は、宮津の公会堂でも開催したことを記憶している。

加悦山田村の富永氏

現在は野田川町に合併しているが、昔し、山田村に、戦前から富永君とよぶすぐれた朝鮮の同志がいた。私が出会ったとき富永君はすでに党員であり、奥さんは朝鮮女性同盟丹後支部の役員をしておられた。富永氏はすぐれた精密機械工であり時計修理を身につけておられ、私は実にその当時はベルラ棒に安い値段で、中古の時計をもらつたことがある。現在それが

私は丹後を出て泊まる家がないときには夜遅く、この富永氏の家を訪ねて泊めてもらい、彼が密造していた焼酎をよく御馳走になつたものである。彼は戦前長壁氏らと、労農党の運動もやつたこともある人である。

「むかしむかし、善党と一緒にはつて悪代官をやつづけていたある男が、ある時善党を陰で裏切つて悪党に味方してしまつた。ところが、悪党の方でもどうもおかしいと思って、みんなよっていじめているとき、その男の首がころりと

ていた悪党はやつぱりこいつは善  
党の廻し者だったといつたが、本  
当は、その男は善党を裏切った甲  
だつた。……」大体こんな筋書き  
きの風刺劇であつたが、そこに集  
まつた多くの子どもや  
ハには大

演説会のあと、長壁 沢田 各諸氏とそれに私と校長と会って話をしたが、校長の気分はなおつていたので安心した。長壁さんの話では校長は、太田氏の支持者であつた。

戦時中大江山には日本治金の鉱山があり、掘出されたニッケルは野田川に沿った特設の鉄道で宮津線の岩瀬口（須津）に輸送されて

いた。この岩瀧口（須津）に鉱山労働者の寮があった。敗戦後直ちに大量の首切があり、労働者は労働組合に結集して首切反対の闘争を展開した。その労働組合の委員長をつとめていた白数君がここに寮に住んでいた。会社側は首切とともに、寮からの立退きを要求してきたがこれをハネ返して闘争をやり勝利した。この日本冶金のストライキを指導したのはさきに述べた長壁民之助氏である。

私がこの白数氏にはじめてあつたのは、宮津の丹後地区委員会の事務所であったが、実に温和な人で、とても労働組合の委員長といった騎士タイプでなく、農民の様な風貌の人であった。それでいて話は実に筋を通す理論家であった。

寮（家）は須津の海岸に立ちならんでいた。無論平家でどこの鉱山でもみられる長屋風のもので、二間か三間の部屋に台所がついているものである。私ははじめて泊めてもらった時、戦争中、労働者がここでくたくたになつて、何の希望ももてず寝起きしていたのかと考へると、いまのたたかいがどんなに大事なものであるかを、強く思わずにはおられなかつた。

静、な朝の与謝の海の風景は美しく自に映った。左に成相山の山脈が北方的な風格で脈々と流れていると思うと、右には遠くに横一文字に天の橋立が眺められた。

この白数氏の家へ河田委員長と共に泊まつたことがある。それはたしか文化工作隊活動の時であり、谷善さんが教育委員の選舉に立候補している時期であった（一九四八〔昭和二三年〕十月）。

白数氏の家に寮の人々を集めて座談会をもつたことがあるが、配給米も買えない深刻な生活の生々しい話がでた。ここに住んでいる人々は、以前は平和産業に従事していた人々が多く、主に機業整備で日本治金に従事してその他の就労していた人々であった。京都で呉服関係の仕事をしていた人々もいた。そんな関係で、白数氏は労働組合の運動も、また闘争も非常に苦しいことがあったと話しておられた。

このことがあってから数年後、京都の北野神社で偶然この白数氏に出会つたことがある。そのときの話では、丹後を引き払つて、京都に住んでいるとのことであつた。

## 岩滝の演説会——河田賢治

私たち文化工作隊は日本冶金の寮をその日の午後出発して、丹後ちりめんの機業地岩滝の集会場で、その晩教育委員候補谷口善太郎の推薦演説会をひらいた。保守的な土地で余り聴衆は集らないだろうと河田さんと話していたが、予想していたよりも多くの人が集まつて來た。演説会のあと、こゝでも例によつて座談会をもつたが二十名余りの人々が残り、夜更けまで町の人々と話しあつた。話の中心はこれから先きちりめんはどうなるのだろうとか、税金が無茶のように高くて再生産の意欲が湧いてこないとか、問題は山積であった。

岩滝は河田賢治氏の出身地であり、先祖の墓もここにある関係で、正月と盆にはどんなに党務が多く忙な時でも墓参している河田賢治さんは、町の人々は好意をもつており、町の誇りとも思つていた関係で、河田賢治さんの話には、集まつた人々は大きな関心をもつっていた。河田賢治さんは昭電辯獄事件を徹底的に曝露し、中国共産党的活動などを興味深く話した。私たち文化工作隊は、その夜更

## 領収書にかえて

93号につづいて、この号では、90号に  
3・3・19～7・13に受領させていた  
いたいの方々のお名前を掲載さ  
せていただきます。厚く御礼を申  
し上げます。

けに丹後山田の富永君の家まで戻つて、自家製の強い焼酎を御馳走になつたものである。

**細川連立政権批判の声を  
次号誌上で特集します。**

ご意見をお寄せ下さい。

自民党長期政権に代わる政府を、という国民の願いを逆手にとつて、自民党以上の、自民党の時にはやれなかつた反国民の政策を、一挙に進めて来ているのが、細川政権五ヶ月の実態です。

日本農業破壊の暴挙であるコメ輸入自由化の政府決定を先頭に、年金支給開始の六五才繰上げ、入院患者の食費自己負担化、福祉法に反する児童保育での公的責任の放棄、消費税率の引上げなど、様々な改悪が目白押しに、日程にのぼせています。

「生涯を労働者として南区の田中豊藏さんの活動」は三回にわざ改革は放棄されて、小選挙区制の

導入を強行するなど、どの政策をとつてみても、自民党以上の「第二自民党」という規定が、日に日に露わになってきています。パフォーマンスに長けた細川首相への期待は、幻想にかわってきてます。社会党は全く変質しました。

この党が政権にしがみついていることが、一層それらを加速しているといえましょう。

会員の皆さん、細川政権への徹底した批判の声を、次号誌上にお寄せ下さい。

原稿締切 九四年一月二〇日(木)  
字数 六〇〇字以内

送先編集部(下記)

ました。

私は京都下南年金者組合の機関紙「KYOTOしもみなみ」の編集部にあたっているものです。今

たって、本誌に記載されました。多くの方に感動をよんでいます。次の手紙が編集部あてによせられました。紹介させていただきます。

拝啓、先日は電話で失礼いたし

私共「ト南年金者組合の最高年令

者の組合員さんです。

田中さんの波乱に満ちた長い闘争歴と、あの独特の語り口を読んでいますと、まるで映画を見ているように深い感動をおぼえ胸があつくなります。

誠に勝手なお願いですが、この田中さんの記事を、わが「しもみなみ」「機関紙」に転載させていただけないでしょうか。

そして私たち組合員のはげみにしたいとおもいます。おゆるしがいたければ転載分の「しもみなみ」を贈らせていただきます。どうかよろしくお願い申しあげます。

貴誌の益々の御発展をお祈り申し上げます。

「生涯を労働者として」上を読みました。

うれしくて、うれしくてナミダをおさえて読みました。長い労働者として、今まで九十年、よく生きられたと思います。苦しい生活の中で、ガンバッテこれた事を心からうれしゅう御座います」

編集部より

京都市南区東九条  
浅野 隆

敬具

三号分にわたって、九〇才にもなられた田中豊藏さんに、長い生涯の活動と闘いの姿を語っていただきました。貴重な歴史の証言です。有り難うございました。

会や本誌については、編集部担当

の奥田修三(宇治市広野町寺山17-257)、○七七四・四三・一三四七)、湯浅貞夫(京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六)の両名のいずれかにご連絡下さい。